秋田・秋田城跡

1 所在地　秋田市寺内字鵜ノ木
2 調査期間　一九八四年（昭59）四月～七月（第三九次調査）
3 発掘機関　秋田市教育委員会秋田城跡発掘調査事務所
4 調査担当者　小松正夫・日野　久
5 遺跡の種類　城柵（官衙）跡
6 遺跡の年代　奈良時代～平安時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

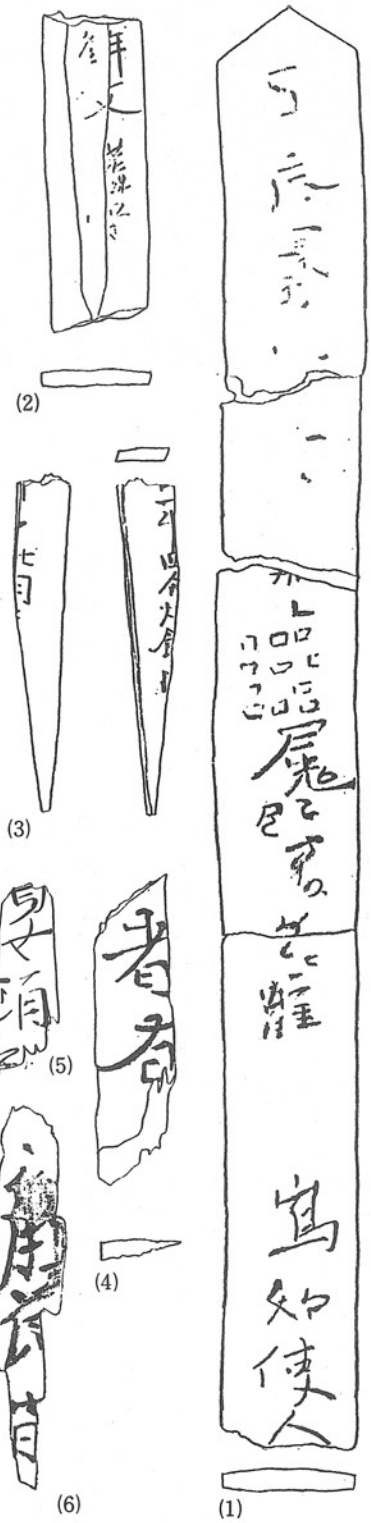
秋田城跡は一九五九年からの四年間の国営調査と一九七二年に秋田市教育委員会が秋田城跡発掘調査事務所を設置してから現在までの調査の結果、東西・南北約五五〇mの外郭と、東西約九四m、南北約七七mの政庁域が確認されている。

木簡が出土した調査地は鵜ノ木地区で、秋田城東外郭線の外、約二〇mの古代の沼沢地の西岸付近である。一九七八年にはこの沼沢の南で掘立柱建物群と共に検出した井戸跡から「天平六年月」と釘書きされた木簡をはじめ一六点の木簡が出土している。

第三九次調査で出土した木簡は六点で、いずれも沼沢地の泥炭層からの出土である。泥炭層は縄文時代後期初頭頃に形成されはじめ、秋田城の存在した奈良・平安時代にも浅い沼沢となっていたもので、中世には南・西岸の一部が埋めたてて整地され、その整地層上に掘立柱建物、土壙墓などが営まれている。北・西岸はまた、砂によっても埋まり、岸は次第に沼沢地の中に入りこんでいる。この砂は人為的なものか自然によるものか不明であるが、北・西岸では土留めの杭列を検出している。木簡が出土した本次調査地はこの沼沢地の北・西岸にあたるが、出土遺物からその時期を想定すると平安時代中頃の岸と考えられ、奈良時代の岸はさらに、その北・西に位置するものである。

秋田城跡調査位置図

（秋　田）



したがって沼沢地の泥炭層は岸辺で幾層にも砂を間層にして堆積しているが、沼沢中央では層序の識別ができない状態であった。この泥炭層からは木簡の他に、斎串、刺串、人形、馬形、矢羽状木製品、絵馬状木製品、曲物、漆器皿、挽物椀・皿、下駄などの木製品が多量に出土した。また、人面墨書土器（五点）、墨書土器（四三点）漆紙（二点）、石帯（丸鞆）などが出土した。とくに、斎串、刺串、人形、馬形、人面墨書土器、呪符木簡などまじないに関連する遺物がまとまって出土した。このことは調査地が秋田城の外郭東門の推定地の付近であることから、秋田城でとりおこなわれたまじないの儀式の実態を示唆しているようで興味深い。

8　木簡の釈文・内容

(1)　□□□□□□□（符籙）□□□〔加カ〕□□〔離カ〕嶋如使人　(340)×31×5　019

(2)　解文□□　(104)×25×4　081

(3)　・□一斗四合□食□
　　・□□七月□×　(80)×(14)×3　081

(4)　者□　(66)×(19)×4　081

(5)　□女須□　091

(6)　□□〔解カ〕七日　091

以上、第三九次調査出土木簡は六点であるが、(1)の呪符木簡以外は断片あるいは削屑であり、その性格および内容は明確でない。(1)の呪符木簡については「…嶋如使人」という文字が読みとれ、「急〻如律令」の普遍的な呪符木簡の呪文の使用とどう関係するのか問題である。(2)は左半分が刀子によって削り取られているが、「解文」と判読してよかろう。(3)は食料の授受に関連する内容であり、表面「食」の上は火偏の字である。裏面には月日が書かれており、付札か文書木簡の断片と考えられる。

紹介した資料は一九八四年の出土であるが、多量に出土した木製品の整理のため年度概報では一部写真で報告しただけで、その後一九八五年の木製品整理の段階であらたに確認されたものもでてきたため、ここで合わせて第三九次調査出土木簡としてその概略をまとめたしだいである。

なお、木簡の釈文・内容については平川南氏の御教示を得た。

9 関係文献

秋田市教育委員会『秋田城跡　昭和五九年度秋田城跡発掘調査概報』（一九八五年）

（日野　久）

人面墨書土器

福井・九十九橋（つくもばし）

1 所在地　福井市中央・照手

2 調査期間　一九八四年（昭59）一二月～一九八五年二月

3 発掘機関　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

4 調査担当者　山口　充

5 遺跡の種類　城跡

6 遺跡の年代　江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

九十九橋は、福井城の外堀を兼ねていた足羽川に架かる橋としては、明治初年までは唯一のものであった。また、北陸街道の福井城下への入口にもあたり、さらに水運の面でも、三国湊からの物資の搬入地にあたっていて、川舟改所が設けられていた。

（福　井）

木簡は、橋の改修の工事の際に発見され、同時に橋脚に使用した丸太の根部や石垣もみつかった。木簡や